

『ベル・ジャー』

—エスタ・グリーンウッドのアイデンティティー探索をめぐって—

加茂映子

The Bell Jar

—on Esther's Search for Her Identity—

Eiko KAMO

ABSTRACT: *The Bell Jar* (1963) is the only novel by the well-known American poet, Sylvia Plath (1932–1963). This novel is autobiographical, written about her attempted suicide (1953) when she was a student at Smith College and how it came about.

In the 1950s and early 1960s, women were not treated equally to the same extent as they are today in North America and most other modern countries.

Esther, the heroine of the story, is a college student living in the outskirts of Boston. Desiring a life on equal terms with men, she searches for her own identity. Her failure to find it results in her nervous breakdown and attempted suicide.

Afterwards, she is sent from one hospital to another. Due in part to the treatment she receives in the hospitals, in part to her comfortable environment, and in part to something inside her set on recovery and other factors, she becomes well enough to return to her old life, continuing her courses at the college if she passes her interview with the doctors.

Throughout the story Esther is lonely. Her father died early in her childhood. She craves the love and company of her mother, who is a very traditional woman, yet it is precisely this type of woman that Esther dislikes most, and her love for her mother often changes completely into feelings of resentment and hate.

It might be said that in exposing her own life through this novel, Plath was making a statement to the world against the violence of a male-dominated society.

Key words: Self-Identity, Mother-Daughter Relationship, Male-Dominated Society

シルヴィア・プラス (Sylvia Plath, 1932～1963) の詩人としての名声は、今日、生前の彼女には想像もつかなかったであろうほど高い。『ベル・ジャー』 (*The Bell Jar*, 1963) は彼女が遺した唯一の小説である。1953年8月の夏期

休暇中、スミス女子大学の学生であったプラスは自殺をはかったが、運よく助けられ、病院に移され、そこで5か月余りを過ごした。この体験は彼女が書いた詩や短篇作品の中で断片的に再現されているが、『ベル・ジャー』は、自殺

未遂とその前後の状況を主人公、エスタに回想させ、語らせることによって自らの体験を描いた自伝小説である。

ここで、プラスのその後の略歴を述べておきたい。

1954年2月に復学したプラスは翌1955年5月、スミスを最優等で卒業し、フルブライト奨学金によりイギリスのケンブリッジ大学に留学した。すでに高等学校在学中に創作を始めており、その作品は「セブンティーン」や「クリスチャン・サイエンス・モニター」などに掲載されていたが、ケンブリッジ大学に留学中もプラスは英米の新聞や雑誌への寄稿を続け、「自らの内にある最高のものを言葉にすること」によって生きてゆこうと決心していた。

1957年5月、ケンブリッジ大学での課程を修了するが、この間、1956年6月にはケンブリッジ出身のイギリスの詩人、テッド・ヒューズ(Ted Hughes, 1930～)と結婚した。二人が共有していたのは芸術へのひたむきさと詩にたいする情熱であった。1957年6月、プラスはテッドとアメリカに帰り、母校スミスで教職についた。しかし、この仕事は彼女の創作のためのエネルギーを甚だしく奪ったために数か月で退職した。その後、ボストン大学の創作セミナーの聴講生となり、また、秘書としてマサチューセッツ総合病院精神分析治療室に勤務した。その間に得た患者の症例や読み耽ったユングやフロイトの書物はプラスの自己分析への関心を助長したと思われる。1958年12月10日には5年前にマクリーン病院で世話になり、信頼を寄せていたルース・ボイシャー医師に会いに行き、六か月余り面接治療が続けられた。プラスは12月12日の日誌の中で自分の恐怖の感情の詳細な分析を行なっている。

書くことについて：私の恐怖論理は次のように連鎖している。私は多くの短篇、詩、そして一つの小説を書き、テッドの妻であり、私たちの赤ちゃんの母でありたい。テッドの望むように書いてほしいし、好きなどころで暮らしては

しいし、私の夫で、私たちの赤ちゃんの父親であってほしい。私たちはいまも、そして多分、今後ずっと、著作で生計を立てることはできないであろう。だが、著作だけが私たちが望んでいる唯一の職業なのだ。私たちのエネルギーと時間を犠牲にせず、また、本来の仕事を損なわずにお金を得るには何をすればよいのか。

これより四か月前の8月3日の日誌においてプラスは「もし今年、気遣いみたいに書きに書いて、ある女の物語を出版することができれば、詩集を一冊書き上げることができれば、喜ばしいことだ」と記している。8月27日の日誌には「昨夜、私の小説を書き始めた夢を見た」と述べ、9月14日には「その小説は来月着手するのがいちばん良いだろう」と言っている。

そして上に挙げた12月12日の日誌の続きの部分で、プラスは「どうして私は小説を書かないのか」と自問している。そしてその余白に彼女は後に「私は書いたわ！1961年8月22日『ベル・ジャー』」と書き加えている。この記録から推察すると『ベル・ジャー』は1958年10月頃から1961年8月の間に書かれたと思われる。

1959年12月、二人はふたたびイギリスにわたった。1960年4月、プラスは自宅でフリーダを出産、同年10月には処女詩集『巨像』(Colossus)が出版され、1961年8月22日には『ベル・ジャー』の最初の草稿が完成した。1962年1月、プラスはニコラスを出産、やがて、テッドは他の女性に心を惹かれるようになり、家を出た。プラスは子どもたちを連れて12月にロンドンのフラットに移った。1963年1月14日『ベル・ジャー』はヴィクトリア・ルーカスの筆名で出版された。2月8日プラスはテッドと会っているが、2月11日の朝、ガス自殺をしているのが発見された。二人の子どもは無事であった。

プラスの作品を読むとき、他の作家のものを読むとき以上に彼女の実人生のことを考慮しなければならない。1959年10月4日の日誌には「私のフィクションとは、子どものときに、ま

たそれ以後、私が感じたことを飾らずに再創造したものである」と書かれている。『ベル・ジャー』は自身の自殺未遂を終始扱っているの、彼女の実人生との関係についての観点からの考察も必要ではあるが、本論文においては、主人公、エスタ・グリーンフィールドの生き方に焦点を絞って、エスタのアイデンティティーの崩壊とその回復を跡づけ、その経緯について考えてみたい。

はじめに、ストーリーのあらましを述べておく。

エスタ・グリーンフィールドはボストン近郊のカレッジの学生である。ニューヨークのファッション雑誌がアメリカ全土から募集した文芸作品の懸賞で選ばれ、11人の女性と共に1953年の夏の一か月をホテル・アマゾンに投宿して、8月号の編集の仕事に携わる。華やかな衣装の山、知名人との出会い、宴会、奔放なデート、写真を撮られることなどに違和感を覚えるエスタは、次第に自分を見失っていく。だが、自己分裂の萌芽はすでにそれまでの生活、とりわけ、ボーイフレンド、バディとの関係や母との関係の中にあった。さらに、ニューヨークでの仕事の後に参加する予定であった夏期講座の創作クラスへの不合格の通知が彼女の自己喪失に拍車をかける。精神分析医による治療も効果を奏さない。追い詰められたエスタは自殺をはかる。発見され、助けられ、精神病院を転々とし、最後の病院で良い主治医の導きもあって快方に向かい、退院の可否を決める委員の待つ面接室に向かうところで、この小説は終わる。

この小説には読み手を困惑させ、心をかき乱すものがある。というのも、いわゆる教養小説の主人公の要件、すなわち、成長にともなう自己発見、社会からの疎外、世代間の軋轢、愛の試練などを、エスタも経験したにもかかわらず、小説の最終部でのエスタの前途は教養小説の主人公の場合と異なり、全くの未知数、いやそれどころか不安に満ちているからである。

小説の前半では、ニューヨーク滞在中の出来

事に加えて、それに触発されて彼女が思い出す過去の場面が彼女の心に映るがままに描かれ、この手法は新鮮で興味をひく。しかし後半、エスタが神経の破綻をきたすと描写は平板になり、小説というよりむしろ病歴となって話が終わるといふこの小説の書き方もまた、読み手の困惑を助長する。

そして最後に、いまは回復しているとはいえ、エスタが振り返って語るこの体験には他人事として読み過ぎし得ないものがあり、読み手を不安にさせる。なぜなら、エスタの神経の破綻は異常であるとしても、心の正常と異常の間に明確な境界がないからには「私はエスタにならない」とはだれも断言することができないからである。

心の病をもたらす要因は単に一個人の気質にあるだけではなく、制度や慣習といった社会の圧力にもあることをこの小説は示している。これからエスタのアイデンティティーの崩壊とその回復について考えるが、特に、彼女を取り巻く社会が彼女に強いる女性像、および、彼女と母との関係という点から考えてみたい。

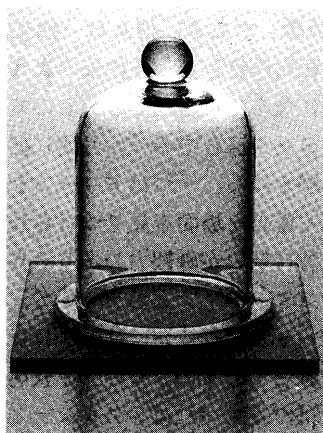
作品の表題となっているベル・ジャーは、精度の高い器具にかぶせ、埃よけなどに用いるもので、ガラスの厚みのために中の物体が少し歪んで見える。この小説では、このガラス鐘に比喩的な意味を持たせ、主人公に覆いかぶさり、閉じこめ、窒息させるものの象徴として用いられている。

エール大学の医学生、バディは、エスタにとって初めは憧れの男性であった。若い娘にとって、将来有望な青年をボーイフレンドに持ち、結婚することこそ成功でありまた幸福であると世間は考えており、彼女も何となくこれに同調していた。エールの学生が主催するダンスパーティーにバディから誘われたエスタはパーティーの後ニューヘヴンの街の灯りが見下ろせるところで「彼がキスしている間、家の灯りの間隔をこの夜の記念によく覚えておこうと目を大きく開けていた」。エスタは見られるよりむしろ、見る女性であるが、普通の娘が願うよう

に、バディが自分を好きになってくれることを切望してもいた。

その年の秋、三年生になったエスタは病院の中を見せてくれるようにバディに頼む。エスタが見たものの中に産婦の分娩の場面があった。バディの友人、ウィルは「本当は見ない方がいいんだ。見たらきっと子どもが欲しくなくなるよ。女に見せるものじゃないんだ」と言う。産婦は見られる対象であり、それを見るのは男性に限られているのである。だが、エスタにとって最も重要と思われるのは「赤ん坊が私から出てくるところを自分の目で見、たしかに自分の子どもだと確信することだ、どっちみちあの苦痛を我慢しなくてはならないのなら、目を覚まして耐える方がよい」と思う。

病院を見た後バディの部屋に寄ったエスタは彼にだれかと性的な関係を持ったことがあるかと尋ねる。そしてバディが夏休みにアルバイト先でウエイトレスと頻繁に会っていたことを知ったとき、エスタの中の何かが凍りついてしまった。性的にも対等でありたいと思っているエスタにとってこれは裏切りであった。しかし、女性の成功と幸福に至る道は有能な男性との結婚のみにあると、世間は主張する。また、母が送ってきたリーダーズ・ダイジェストの切り抜き記事は「女性はたとえ夫となるべき相手とでも結婚後でなくては絶対に寝てはいけない」と主張していた。



『ベル・ジャー』

バディは「男が女に求めているものは自分の伴侶であり、女が男に求めているものは無限の安定だ」また「男は未来に向かって飛んでゆく矢で、女はその矢が飛び立つ起点だ」とエスタに言い聞かせようとする。この言葉を彼に言っているのは彼の母なのだ、そして母は父と幸福に暮らしている、とさえバディはエスタに言った。

ところが彼女が最もなりたくないものは「矢が飛び立つ起点」になることであった。詩集『エアリアル』(Ariel, 1965)のタイトル・ポエム「エアリアル」においても「私は矢となる」“And I / Am the arrow,”と表明されている。エスタは結婚生活を否定する。彼女はバディを見捨てることにした。

ところが一週間後、彼が電話で「定期検診で結核にかかっていることがわかったので療養所に入る、週に一度は手紙がほしい、クリスマスの休みには療養所へ来てほしい」と言ってきた。エスタは「あなたを見捨てることにした」とは言いそびれたが、身軽になってほっとした。ただ、彼女がバディというすばらしいボーイフレンドを得たと思っている人々に彼女は本当の気持ちを打ち明けることはできない。皆は彼女の考えを馬鹿げていると思うであろうから。その結果、彼女はバディの療養所行きを知った人々から同情の言葉を浴びせられることになる。

エスタは本来の自分を抑えて、社会通念に合う仮面を着けなければならなくなり、孤立する。ベル・ジャーはこのときすでに彼女の頭上にかかっていたといえよう。

クリスマスの休みに、エスタはバディの父に伴われて心ならずもバディに会いに行った。彼は耳もとで「バディ・ウィラード夫人になることをどう思う」とささやく。エスタは「私は結婚しないの」と言うが、彼はこの返事を真剣に受け取らない。そこでエスタは以前に交わした会話を彼に思い出させる。「あのときあなたは田舎に住みたいか街に住みたいかって尋ねたわね」「……」「私は田舎と街と両方に住みたいっ

て答えたわ……そしたらあなたは笑って言ったわ。きみは本物の精神病患者になる素質を十分に持っているって」

いまエスタは言う「もし精神病ってというのが二つのまるで相反するものを同時に願うことなら、私は本当に精神病よ。私は二つの相反するもの間を半分はあちら、残りの半分はこちららってふうに、行ったり来たり飛び回って過ごすの」と。

彼女のこの生き方はギリシャ神話のケレスの娘、プロセルピナの運命、二つの相反する世界に生きざるを得ない娘の運命を思い起させる。

すでにエスタは九歳のときに自分は結婚しないだろうと思っていた。その理由は明らかにされていないが、エスタは母の生活を見てそのように思ったのであろう。また、プラス自身の経験も反映していると思われる。

さて、ファッション雑誌、レディズ・ディの編集員としてボストン近郊から初めてニューヨークに出てきたエスタは、奢侈と虚飾と奔放な性の世界に取り込まれてしまう。彼女の内部で何かが崩れ始めた。この崩れを示している事柄として、偽名を使うということがある。仲間、ドリーンと共に街へ出かけたエスタは見知らぬ男から声をかけられ、自分をシカゴから来たエレン・ヒギンボトムだと言ってしまふ。彼女は「その夜の自分を本当の自分や出身地と結びつけたくなかった」。ここに彼女が現実との折り合いをつけることの困難さ、および彼女の自己分裂の兆しが見られる。

エスタはドリーンと相手の男の繰り広げる乱痴気さわぎに耐えられなかった。ドリーンを残して先にホテルへ帰りついたエスタがおふろに入った後眠っていたとき、帰ってきたドリーンがドアを叩き、「エリー、エリー」と呼ぶ。別の声が「ミス・グリーンウッド、ミス・グリーンウッド」と呼ぶ。酔っ払ったドリーンとメイドの音が寝入りばなのエスタの耳に入り混じって響く。はじめ、エリーなんて人、知らないわ、と思ったエスタはやがて気がついて「自分が二人の人間に分裂したかのような錯覚」にと

らわれる。

エスタの自己喪失にかかわる別の体験について述べよう。先ほど彼女は浴槽の熱い湯につかりながらいま見聞きしたものに対して、「みんな溶けてなくなれ、私は清められたのよ」と心の中で叫んでいた。浴槽から出て大きい柔らかい白いバスタオルにくるまると「自分が新しく生まれた赤ん坊のように無垢で新鮮になったように感じた」。

また、この雑誌社が主催する昼食会に出されたアボガドのかにサラダでプトメイン中毒を起こし、激しい苦痛の後に鎮静剤による眠りから覚めたときにも、彼女は「すっかり洗い清められ、神聖になり、新生活が開けていくような気がした」のであった。

さらにまた、以前、スキーの指導者ぶったバディに強いられ、雪の急斜面を滑り降りたときにも、彼女は彼女自身の過去の中へ落下してゆき、「その最後にある、母親のおなかの中の白いかわいい赤ん坊のようなものに衝突した」のであった。自己を見失いそうなとき、エスタは生まれる前の状態に、あるいは母の胎内に戻りたいと思うのである。これはまた、死への希求でもあった。

女性だけが純潔を守り続けた結果到達する結婚というものを否定するエスタはそれなら自らも純潔を捨て、そうでない者同士で結婚すればよいと考える。いままでのところ結婚したい男性は居ないし、彼女が何よりも望んでいるのは「変化と刺激」である。彼女は「独立記念日の打ち上げ花火の色とりどりの矢のように、あらゆる方向に飛んでゆきたかった」のである。

ニューヨーク滞在中の一月間に彼女は三つの男性体験を経る。一つはドリーンとその相手との激しく露骨な場面を見せつけられたこと、二つ目は背は低いが直観力のありそうな国連職員、コンスタンティンとのデートで、エスタは彼のアパートまで行くが、飲みつけないワインのせいで眠ってしまい、そのまま夜明けに目が覚め、そばで寝ていたコンスタンティンに送られてホテルへ戻る、というものであり、純潔を

捨てようという彼女の決心は成就しなかった。三つ目は、もうすでにかなり虚ろな精神状態になっていたエスタがニューヨークを去る前夜、ドリーに誘われて行ったダンス・ホールで会った冷酷でずさみきった男の暴力に屈しそうになるところを辛うじて、しかし、しっかり固めた握りこぶしで男の鼻をなぐり、血を流させて、逃れる、というものである。エスタは取り返しのつかぬほどまでに、この大都会に毒されてしまったといえよう。

家に帰ったエスタが自殺をはかるまでのおよそ一か月半の彼女の行動を自己喪失の点から、また母との関係の点から考えてみたい。

一般に、自己を喪失することの徴候の一つは時間に対する意識の変化であろう。以前のエスタは「一日一日の連なりを、光る白い箱が並んでいて、その箱の一つ一つを黒い影のような眠りが区切っている」ものとして、思い浮かべた。最近、自分を見失い、眠れなくなってからは「一つの箱と隣の箱を区分する影がはじけ飛び、毎日がどこまでも荒涼とした白く広い道のようにつながって目の前に光って見える」のである。

エスタはタイプライターに向かって創作を試みた。それは「イレインは母の古びた黄色のナイトガウンを着て……」で始まる。このことはエスタが自分の分身である作中人物を媒体として母に依存していることを示している。一方、彼女の母への潜在的な憎しみは、同じ部屋で寝起きしている母への思いに表わされている。先に休んでいるエスタの隣のベッドへそっと横になった「母の頭のピンカールが下ろしてあるブラインドから忍び込む街灯の薄明りで小さな銃剣のように光って見え、口を少し開いている母のいびきの豚のような音はエスタをいらだたせ、それを止めるにはその音を出している皮膚と筋肉でできた円筒形のを両手でつかんで静かになるまでねじるしかないように束の間思えた」のであった。そしてエスタ自身はマットレスと詰め物をしたベッドの台の間にもぐりこんで、墓石のようにマットレスをひっかぶっ

た。母への依存と憎しみと自己の抹殺とは無関係ではない。

ニューヨークから帰って三週間が経ち、エスタは精神科医、ゴードンの面接治療を受けることになる。この医師にはエスタの心が見えない。この面接に失望したエスタには待っていた母の顔が「レモンの輪切りのように」見える。診察代は一時間二十五ドルで、次週も来るように医師が言ったとエスタから聞いた母はため息をついた。母に経済的な負担をかけていることもエスタを追い詰める一因となる。

母は働きに出かけるが、一方、エスタは家を外にさ迷い歩くようになった。行きずりにデートをした少年水兵に自分の名はエレン・ヒギンボトムでシカゴ出身だという。

二度目の面接治療の後、母が呼ばれ、電気ショック療法を勧められた。エスタは電気ショックには思い出があった。子どもの頃、父の遺品の古びた電気スタンドのコードを引き抜こうとして感電し、母のベッドに仰向けに倒れたのだ。また、エスタはニューヨークに滞在中、ローゼンバーグ夫妻が確かな証拠もないままに電気椅子で処刑されたことから甚だしい衝撃を受けていた。

処刑が行なわれるという日、エスタは仲間の一人に「ローゼンバーグ夫妻のことおそろしいわね」と話しかけた。「ほんと！」という返事に共感がこめられていると思ったのも束の間、相手はすぐ続けて「あんな人たちが生きているなんて本当におそろしいわ」と言ったのである。電気椅子による非人道的な処刑がもたらす恐怖に加えて、彼女のすぐそばに処刑を唱道する人々がいるということがエスタの混乱と分裂を促した。彼女の受けた衝撃の大きさはこの小説がこのニュースの描写で始まっていることから明らかである。「電気椅子で死刑にされることを想像するとやりきれなく……生きたまま神経に電流を通して焼かれるなんてどんなふうだろうと想像しないではいられなかった……この世で最低のことだわ」と彼女は思ったのであった。

ショック療法を逃れるために遠くへ行ってしまうかそれとも自殺するか、と思いが頭を駆けめぐらううちにその日がきた。

ショック療法が施された瞬間の状態を彼女は「何かが襲いかかってきて私をつかまえ、この世の終わりのように私を揺すぶった……私の骨が折れて、折れた木のように液汁が私の体から流れ出してしまうのではないかと思った」と表現している。

ゴードン医師は母に、もう二、三度この治療を受ければエスタは良くなるだろう、と言った。母は「いま、病院で見た生ける屍みたいな人たちのようになりたくないでしょ。治療を受けるのは、あなたが良くなるためなのよ」と言うが、エスタはあのおそろしい治療を二度と受けるつもりはないし、生ける屍となって生き永らえたくもない。死を選ぶ以外に道はない。彼女の放浪は続く。

友人に誘われ、海へ行ったエスタは疲れて戻ってこられなくなるほど遠くまで沖に向かって泳いでゆこうと思った。しかし、「水を掻くと心臓の音が単調なモーターのうなりのように『わたし わたし わたし』(I am I am I am)」と響く。精神はほどけてしまったけれども、心臓の鼓動は彼女の存在を主張していた。

エスタは二度自殺をしようとしている。その内一度は母のベッドに座って、母の黄色いバスローブ—エスタが書きかけた小説の主人公に着せた—のひもを首に掛けてそれを引っ張ってみた。彼女の母への強い執着がこのような方法を取らせたのであろう。彼女は自分の意識が正常でなくなってゆくのに気づいていた。貧しければ貧しいほど、回復の望みが少なくなればなるほど、待遇の悪い精神病院の、地下室の大きな檻のようなところに移されるだろう。時間はもう残されていないのだ。

翌朝、母が仕事に出かけるとすぐ、エスタは母が念入りにしまい込んでいる睡眠薬を取り出し、地下室に降り、暗い穴にうずくまり、薬を飲んだ。その様子は次のように述べられている。

静寂が小石や貝殻や、その他一切の私の生命の残骸をさらっていった……それらは集まり、一つの潮のような流れとなって私を眠りの中に押し流した……石を投げ込まれた暗い水の表面がもとの静かな水面に戻るように、静寂が戻ってきた。冷たい風が吹き過ぎた。大地の中心に向かって掘られたトンネルを、私はとてつもないスピードで落下していた。

この昏睡と覚醒はこの小説において最も衝撃的な場面の一つである。にもかかわらず、このくだりは、冥界からのオルフェウスの帰還や、怪物の毒にあてられたトリスタンの甦りや、兎の穴を落ちてゆくアリスを思い起させる。とはいえ、ここにあるのは錯綜する光と闇と不快なざわめきだけがあり、オルフェウスの場合のように妙なる調べも、またトリスタンの場合のように生い茂る葦の水辺の潤いも、アリスの場合のように好奇心を満たす出来事もない。

だが、このように時にこの世ならぬ伝説や童話の世界の雰囲気漂わせるこの手法は、ひととき読者の緊張を解き、読者を集団的無意識の領域へ引き入れ、エスタの体験に同化させるのに効果があると思われる。

さて、エスタの自己喪失の意識と母への愛憎との関連は彼女の意識が戻る際にもみられる。エスタは無意識のうちに母を想った。「のみが打ち込まれ、光が私の頭の中に飛び込み、厚い温かいふわふわした暗闇を切り裂いて声が叫んだ。『お母さん!』」しかし、母が「私に会いたがっているって聞いたものだから」と言い、ベッドの端に浅く腰かけたとき、エスタは「何も言った覚えはないわ」と言う。実際、彼女は自分が母を呼んだとは気づいていないのかもしれない。が、彼女は「母は愛情深く、同時に私を非難しているようにも見え、私は母に行ってしまったてもらいたかった」のであった。

エスタは自分の町の病院からより待遇の悪い市立病院へ移される。彼女は母に「お母さんが入れたのだからお母さんが出して」と言う。

「もし母を説き伏せ、病院から出られたら、母の同情につけ込み、自分の思い通りに母を操れるかもしれない」と彼女は考えている。

窮迫すれば大きな檻のようなところへ移されるのではないかと怯えていたエスタは、意外にもカントリー・クラブのような立派な私立の病院へ移された。これはエスタに奨学金を出してくれている裕福な作家、フィロメナ・ギニアの志しによるものである。母はミセス・ギニアに感謝しなければいけないと言う。それは分かるのだが、エスタは「どこに居ようとも私は相変わらずコップの中で自分が発散する酸っぱい空気にむせ返っているだろう」と思う。

さて、この病院で彼女を受け持ったドクター・ノランを一目見たときからエスタは彼女に信頼感を覚えた。ノラン先生はエスタがゴードン医師から受けたショック治療について話すのを静かに聴いていた。そして、「ここで行なうのはそんなものではない、すーっと眠っていくようなものだ」と言う。本人は経験していないにもかかわらず、こういうものと断定することにエスタは納得できない。それでも強い反発の気持ちが起きなかったのは、彼女の内にノラン先生への信頼があり、また自己収束の芽が育っていたからであろう。後に彼女は電気ショック治療を受けることになるが、それについては後で述べる。

それまでしばしば抱いていた自殺志向の気配をエスタが見せることはなくなった。ほやけてしまった自己の像がふたたび彼女の内で形を取り始める。それには主に二つの出来事がかかわっていると思われる。一つはスミス大学の上級生、ジョーンがこの病院の彼女の隣の部屋に来たことである。もう一つは母の訪問の際にエスタの取った態度である。

まず、ジョーンについて考える。彼女もまた神経の破綻をもたらすような結果に至り、その過程でエスタの自殺未遂事件を新聞で読んで、エスタに共感を抱き、後を追うようにこの病院へやってきた。当時、高等教育を受けている女性が心を病む例は少なくなかったとのことであ

る。目立たない仕方ではあるがプラスがこのことを作品に反映していることは注目してよいであろう。

エスタにとってジョーンはかけがえのない分身であった。しかし、暗い分身、すなわちエスタが切り捨てたく思っている分身であった。ジョーンの症状はエスタより良くなったり悪くなったりしながら、結局ジョーンは自殺してしまう。作者、プラスはエスタの自己収束を押し進めるためにジョーン、すなわちエスタの暗い分身、を自殺させたのであろう。話を戻そう。

ジョーンの自殺の原因は明らかにされていない。ただ、自殺の数日前の深夜、外泊の許可をもらえるまでに回復し、アパートに住んでいたジョーンのところへエスタは行った。というのは、エスタは外出先で起きた性器からの激しい出血のために助けを求めて駆けつけたのである。思いがけない友人の訪問を喜んだのも束の間、ジョーンは動転しつつも救急病院と連絡を取り、治療が済むまで終始エスタにつきそった。このことがジョーンの死の原因であったのかどうかは分からない。しかし、エスタは自分の行動がジョーンの死の引き金になったのではないかと悩んだ。しかし、ノラン先生は「もちろん、あなたのせいではないわ」と言い、また「非常にすぐれた精神科医の患者でも自殺することがある」と話したのだ。ジョーンの両親がエスタに葬儀に出てくれるように言ってきた。ノラン先生は行かなければならないことはないと言ったが、エスタは自分の意志で出席する。それは彼女自身の暗い分身を埋葬するためでもあった。やがてジョーンの新しいお墓の上を土が覆い、雪が降り積もって、その跡を消し去るだろうと、エスタは思った。深く息をつき、彼女は「心臓のいつもの法螺」に耳を傾けた。それは『わたし、わたし、わたし』(I am, I am, I am)と響いてくる。

エスタは前に死に場所を求めて海へ行ったときにも同じような心臓の訴えを聴いた。いずれの場合にも彼女は肉体を通して自己の存在を意識しているが、後者の場合は三つの“I am”が

それぞれ区切られている。それゆえ、いま彼女は自己像をより明確に捉え始めたとみなすことができよう。ジョーンの出現はエスタに自分を直視させ、アイデンティティーを回復させるのに寄与したといえよう。

次に母の訪問について考える。母はエスタにバラの花束を持ってきた。「私のお葬式のためにとっておいて」と彼女は言った。母は顔を歪め、泣き出しそうになりながら、誕生日のお祝いのお花束だと言った。それを聞くや否や彼女はその花をごみ箱に叩き込んだ。この行為は自分と母との絆を否定したい、内に潜む母への依存心を断ち切りたい、という気持ちの現れである。エスタは自己再生への苦渋に満ちた道を歩き始めたのである。このことをエスタから聞いたノラン先生はエスタを理解し、彼女の自立の支えとなるのである。

ある朝突然、電気ショックにかけられることを知り、彼女は動転する。あらかじめ知らせてくれなかったことでノラン先生を恨み、抵抗しようとした。そんなエスタを見て先生もまた動転しているのを見取ったエスタは共感してくれる人のやさしさを感じたのであろう、先生からずっとそばに付いているという約束を取り付け、「古い友人のように腕をからませて」電気療法室へ向かう。

「黒板に書かれたチョークの文字のように暗闇が彼女を消し去った」が、目覚めたとき彼女は緊張や怖れはすっかりなくなり、驚くほど穏やかな気分」であった。

さて、性的にも対等でありたいと望んだエスタには、妊娠の危険がある女性は男性と比べて自由に振る舞えないことが不当に思えた。ジョーンの死よりも前のことであるが、エスタの訴えを静かに聴いていたノラン先生は避妊具の装填の仕方を教え、サイズを合わせてくれる信頼できる医師を紹介してくれた。

許可された外出の時間を利用してエスタは医院を訪れた。彼女は診察台の上で「いま、自由へ上昇してゆくのだ。恐怖からの自由、私には不適切な相手とただセックスしただけのために

結婚してしまうことからの自由、避妊しないで妊娠してしまう貧しい女の子の行く「未婚の家」からの自由へと上昇してゆくのだ」と考えた。

手にした自由を使ってみようというはっきりした意図はなかったかもしれない。だが、町の図書館の階段のところで二十六歳ですでに数学の教授の職にあるというアーウィンに誘われて、エスタは彼のアパートへ行く。昼間に避妊具を装填しておいたのはラッキーだったという思いがワインのせいで面倒なことはしたくない気分のエスタの頭をかすめた。妊娠の危険はなかったとはいえ、処女を捨てた彼女が得たものはひどい痛みと激しい出血であった。アーウィンは送っていくと言うが、まさか精神病院へ送ってもらうことはできず、すでに述べたように、近くに住んでいるジョーンのところへ車をつけさせ、アーウィンと別れたのであった。

アーウィンとの会話の際にエスタが偽名を使った形跡はない。しかし、彼女自身はしきりに「ねえ、アーウィン」と呼びかけている一方、アーウィンが「エスタ」と呼びかけた形跡もない。一緒に過ごしながら彼がエスタの名を知らないままではきわめて不自然なことといえよう。かといって、精神病院から出てきたエスタは本当の名と出身地を明かすことはできない。だから作者はこの点をぼやかしているのかもしれない。

年が明けた。大雪がマサチューセッツの平原をおおう。医師団による面接に合格したらもうすぐ大学に戻り、学業を続けることになるのだ。雪のために大地の表面はすっかり変わって見えるけれども、その下にはいつも同じ大地があるのだ、そのことを思えば、六か月の欠落の後、いま再発することもある意味ではごく小さいことに過ぎないのかもしれない、とエスタは思う。

母は最近、誕生日以来初めて面会にきて「止まったところから歩き出しましょう、みんな悪夢だったというように振る舞いましょう」と言った。エスタは思う「悪夢、私は何もかも覚

えている……いつかは忘却がやさしい雪のようにそれを覆い、感じなくしてしまうのだろう。けれどもそれは私の一部だった。私の風土だった」と。いま、彼女は自分自身や自分の過去と向き合えるようになった。いまだに自分を理解していない母の「青白い嘆いているお月さまのような顔」を見て「精神病院に入っている娘を持つなんて！私にはそんなことをしてしまったのだ」と母の気持ちを察して悔いるようにもなった。

エスタはアーウィンに電話をかけた。救急病院での応急手当てと一週間後の検査の費用を合わせて二十ドルの請求のためである。ことが露になるのを怖れたアーウィンは直ちに救急病院あてに小切手を送るといった。エスタは「これでアーウィンからも完全に自由だ」と思う。だが、彼女は果たして性的に男性と対等であったといえるであろうか。たとえ肉体の傷は癒えても心に刻まれた深い傷は癒えることはないであろう。

医師団の面接を前にしてエスタは不安に駆られていた。「いつの日か、大学で、ヨーロッパで、どこか、どこででも、あの窒息させるような歪んだ吊り鐘がまた私の上に下りてこないとはいえない」と彼女は思う。また、「生まれ変わって」社会に戻ろうとしている自分自身を「修理し、タイヤを取り換えられた車」にたとえている。

この小説は面接室の入り口で「その目と顔が一斉に私の方を向き、それらに導かれて、魔法の糸に引き寄せられるように」エスタが部屋の中に入っていったところで終わっている。それは読者に言い知れぬ不安感を与える。なぜなら「魔法にかけられる」とは、否定的な意味では自己の固有の本質を奪われることであるから。しかし、これを知性や理性では解き明かし得ぬ自らの深淵から語りかける声を聴こうとすること、として肯定的に解釈することはできないであろうか。

ここで主人公の名、エスタ・グリーンウッドについて考えてみる。プラスは1958年5月に知

り合ったエスタ・バスキン (Esther Baskin) に命名のヒントを得たのではないだろうか。画家でありまた彫刻家であるレナード・バスキンの妻、エスタは多発性硬化症のために手足に障害があったが、「自然」についての作家であり、一児の母であった。バスキン夫妻をプラスは敬愛していた。

また、旧約聖書のエステル書において、エスタというユダヤ人の女性はアハシエロス王の妃となったとされている。童話や物語の中の王妃はロゴス、すなわち、分割するものに対して、しばしば集合的な女性原理、新しいエロス、すなわち、結びつけるもの、一つにするものを意味するとユング派の分析家、S. ビルクホイザー・オエリは述べている¹⁾。このような見地に立つならば、死と再生を経て生き残り、いま、母、そして自分史の語り手として創造的な仕事に携わっている主人公にエスタの名はふさわしいものと思われる。

グリーンウッドはプラスの母方の祖母のメイドゥンネームである。プラスのファーストネーム「シルヴィア」は「森」を意味する“sylvan”に因んでつけられた。

大地の表面はさまざまに変化するものの、それでも大地は生き続ける、と悟ったエスタの名字としてグリーンウッドはまことにふさわしい。「森」の持っている、尽きることのない「いのち」と超自然的な「魔法」の力を暗示しているようにも思われる。

その上、小説の始めの部分（第一章）で、語り手であるエスタがいまは良くなって、赤ん坊の母親となっていることが分かり、読者は少しばかり安堵するかもしれない。しかし、現在のエスタについて語られているのは全編を通してこの箇所だけであり、しかもプラスはほんの数行しか割いていないのだ。読者は否応なしに主人公エスタの不安を共有させられるであろう。

この小説がいわゆる教養小説ではないことは初めに述べた。作者、プラスもまた、そのようなつもりで書いたのではないであろう。1959年1月8日の日誌において言っているように彼女

にとって「書くことは自らのアイデンティティーを証明する手段」であった。「フィクションは自分の感じたことの再創造」であり、過去の経験はどんなに傷跡を残そうとも「自分の風土」だと考えるプラスにとって「一人の女の物語」の出版は成し遂げなければならない仕事であった。この小説においてエスタのたどる道程は、当時の女性に課せられた抑圧された役割が分裂病の一因となり得ることを示している。エレン・モアズに「現代の女権運動に彼女ほど大きな意味を持つ作家はいなかった²⁾」と言わしめたゆえんであろう。また、この小説は当時おっぴらにはできなかったであろうローゼンバーグ夫妻の処刑を批判しており、さらに、マサチューセッツ州で禁じられていた避妊を肯定している点で意義がある。

プラスはこの作品が世に出てから一か月を経ずして自ら命を断った。短い彼女の生涯は、こ

の作品が問いかけているものを理解し、この作品から多くを汲み取ることによってこそ生かされるであろう。

* テキストは Sylvia Plath: *The Bell Jar*. London: Faber and Faber, 1963 および *The Journals of Sylvia Plath*. New York: The Dial Press, 1982 を用いた。なお『自殺志願』(田中融二訳) 東京: 角川書店, 1974を参考にさせていただいた。

文 献

- 1) S. ビルクホイザー・オエリ: おとぎ話における母 (氏原 寛 訳). 京都: 人文書院, 1985: 173
- 2) エレン・モアズ: 女性と文学 (青山誠子 訳). 東京: 研究社, 1963: X